

『中辺分別論』における三性説の本質的構造と その意義

金 才 権

1. 問題の所在

『中辺分別論』（以下、中辺論）の三性説は、「虚妄分別」を思想的基盤として設定されている。その際、三性は「虚妄分別」と「二取」との関連で確立されており、このことは『解深密経』の三相説や『瑜伽論』「摂決択分」（以下、摂決択分）の三性説より一層進展した思想的変遷の一面を示唆している¹⁾。

実際、それを『解深密経』や「摂決択分」の三性説と比較検討してみると、『解深密経』や「摂決択分」では依他起性以外はその概念が中観派の二諦とかなり酷似しており、三性、各々の自性の間には緊密な関係が見られないのに対して、『中辺論』では虚妄分別を基盤として三性を統合しており、空性を内含した虚妄分別による三性の包摂関係が確認される。このことは、三性説が『般若経』の空の思想を背景として実践的な側面から形成されたことなど、三性説の形成過程とその思想的変遷の一面を示唆するものと理解される。

それ故に本稿では『般若経』の空の思想をその構造内に体系化した虚妄分別の思想構造を手掛かりとして『中辺論』における三性説の本質的構造とその意義を思想史的観点から考察してみたい。

2. 『中辺論』における三性説の本質的構造とその意義

2.1 虚妄分別の構造的意味

さて、『中辺論』の「虚妄分別」の思想構造を良く示している以下の 1-1 の偈頌を検討してみよう。

虚妄分別はある。そこ（虚妄分別）に二つは存在しない。

しかし、空性がここ（虚妄分別）にある。そこ（空性）においてもそれ（虚妄分別）がある。（1-1）

この「偈の」中で①「虚妄分別」とは所取・能取の分別である。「二つのもの」とは所

(122) 『中辺分別論』における三性説の本質的構造とその意義（金）

取と能取とである。②「空性」とは、その虚妄分別が所取・能取の関係を欠いていることである。③「そこ（空性）においてもそれ（虚妄分別）がある」とは、「空性の中に」虚妄分別が「存在すること」である²⁾。

まず世親釈によれば、下線部の①は虚妄分別の定義、②は空性の定義、③は虚妄分別と空性の緊密な関係を示すものと理解される。一方、安慧釈によれば、上記の a 句の「虚妄分別はある」という一節は、以下の二様に、①中観派が「一切法無自性」という観点から兎角のようにまったく自性がないと考えるので、所依としての依他起性を損減する、その見解を退ける一方、②説一切有部が心・心所と色法とが実体として存在すると増益する、その誤った見解を退けるために説かれたと解釈される³⁾。また、b 句は虚妄分別の存在論的・本質的性格を⁴⁾、c 句は虚妄分別と空性との不一不異の関係や解脱の可能性を⁵⁾、d 句は世間の錯乱や解脱のための努力の必要性などを示すものと解釈される⁶⁾。

以上、世親や安慧の理解に基づくと、「虚妄分別」の思想史的意義は、世親が『小空経』の空の思想を唯識的な立場で新たに適用した、唯識的空観に基づいて仮説の所依を設定している『菩薩地』「真実義品」の「vastu」の思想体系を継承しながら、なおかつ、世俗から勝義への悟入、迷いから悟りへの転換、もしくは雑染から清浄へと転換せしめる基盤を虚妄分別に担わせたことにある。その際、虚妄分別は実体として存在するとともに、その中に空性の存在を実在として認めている点に中観派の二諦とは大別される瑜伽行派の独自の立場が窺える。

2.2 二取と識の関係

実際、二取（所取・能取）と識の関係は、虚妄分別の本質的性格を示すものであり、その関係は『中辺論』の 1-3 偈において、以下のように説かれている。

対境、有情、自我、了別として顕現する識が生じる。
しかし、この「識の」対象は存在しない。前者（対象）が存在しないから後者（識）もまた存在しない⁷⁾。 (1-3)

上記の ab 句では虚妄分別が四種に顕現する識として説かれており、それは世親や安慧釈によれば、次のように解釈される。まず所取に当たる、①対境と有情として顕現するものはアーラヤ識である。次に能取に当たる、②自我として顕現するものは染汚意であり、③了別として顕現するものは眼識を始めとする六「識」である⁸⁾。その際、四種としての顕現（二取）は遍計所執性に当たるであろう。

一方、cd 句では四種の顕現（狭義の二取）を広義の対象と置き換え、その対象と識の関係が示されている。ここで注目すべきはこの対象と識の関係をどう理解

『中辺分別論』における三性説の本質的構造とその意義（金） (123)

すべきかという問題であるが、世親釈によれば、所取と能取の対応関係（広義の二取）として説明され、意味上、その関係が二重構造として解釈される可能性をも示唆している⁹⁾。ここに世親の意図が隠されているかも知れぬが、そのことは認識客観（相分）と認識主観（見分）との一般的な認識関係を示すものではないと判断される。安慧釈による限り、『中辺論』では、それは虚妄分別を基盤とした三性における依他起性と遍計所執性の論理的関係を示すものと理解される¹⁰⁾。

さらに安慧は四種として顕現する識をアーラヤ識との関係に基づいて以下のように解釈している。④対境、有情、自我、了別として顕現し、[心作用の] 相応を伴うものであるこれら八識は、集諦に包摂され、助力縁に依存するアーラヤ識から、それぞれの可能性に応じて五趣のうちに生じる。⑤アーラヤ識には善・悪・無記の法の潜在印象を有する特殊な変化 (pariṇāma-viśeṣa) が存在するが、その支配力によって相互に相違して顕現する識が生起する¹¹⁾。

以上、安慧釈に基づく、二取と識の関係は、虚妄分別がアーラヤ識と解釈されているので、その虚妄分別（依他起性）から四種の顕現（遍計所執性）へと展開する、つまり、流転門へと活動する虚妄分別の性格を良く示している。その際、アーラヤ識は、四諦の中で集諦に包摂され、四種の顕現の原因として活動しているので、それが四種として顕現する虚妄分別の思想的基盤となっていることが窺える。内容的には同論 MVK3-8bcd・9 の三性と四諦の項目に繋がる。

2.3 虚妄分別と三性の関係

『中辺論』1-5 偈では三性説の定義が、先行する 1-3 偈に連なるものとして、以下のように設定されている。

「「識は、」①対象という観点から「分別された（自性）」であり、また②虚妄分別」という観点から「他に依存する（自性）」であり、また③二無という観点から「完全なる（自性）」に他ならないと説かれているのである」¹²⁾ (1-5)

ここで三性は、虚妄分別を基盤として各々設定されていることが分かる。まず世親釈によれば、対象は遍計所執性、虚妄分別は依他起性、二取の無は円成実性と定義されている¹³⁾。一方、安慧釈によれば、三性が虚妄分別の存在論的性格を基盤として各々規定されているので、「虚妄分別」の中に三性が包摂されると理解される。それをまとめると、以下の通りである¹⁴⁾。

①依他起性一因と縁に支配されるので、他ならぬ「虚妄分別」のみが「他に依存する（自性）」である。

②まさにその同じ「虚妄分別」は、それ自体において存在しないにも関わらず、

(124) 『中辺分別論』における三性説の本質的構造とその意義（金）

所取・能取を本質とするものとして顕現するので、「分別された（自性）」である。

③まさにその同じ「虚妄分別」は、所取・能取を欠いているので、「完全なる（自性）」である。

④かくして「虚妄分別」における、遍知されるべきこと、遍知してから (parijñāya) 断滅されるべきこと (prahātavya), 遍知してから直証されるべきこと (sākṣātkartavya) が明らかにされたことになる。

まず、上記の①－③の安慧の解釈を見ると、三性は、意味上、虚妄分別の本質的特性を述べる MVK1-3・4abc に連なるものとして、各々別個に存在するのではなく、虚妄分別の基盤において三性の形態として各々設定されているにすぎない¹⁵⁾。そこで、実際に存在しているものは虚妄分別に他ならない。

一方、④の内容は、意味上、MVK1-4d に連なるものとして、迷いから悟りへの転換、もしくは雑染から清浄への転換の構造を示す、つまり三性の修道論的意味を示唆するものと理解される¹⁶⁾。この一節は、古来からの四諦現観という実践を三性に適用したものと理解されるが、同論 MVK3-9cd・10a にはより詳細に道諦の項目で説明されている¹⁷⁾。

以上、虚妄分別と三性の包摂関係をまとめると、まず虚妄分別から遍計所執性への説示は流転門へと、一方、「虚妄分別」の本質的特相を遍智し、遍計所執性を遍智することから、順次、依他起性を断滅し、円成実性を直証するという説示は還滅門へと結びつくと理解される。すなわち、このことは、①「虚妄分別」の虚妄性を遍智しない限り、「虚妄分別」から遍計所執性へと展開する流転門へと、②「空性」を直証してから無分別智を獲得し、その後、得られる清浄世間後得智の所縁たる依他起性（虚妄分別）¹⁸⁾を二取（所取・能取）を欠いている「vastumātra」又は「vijñaptimātra」¹⁹⁾と遍智している限り、順次、遍計所執性を遍智することによって、依他起性を断滅し、円成実性を直証する還滅門へと展開する両方向性を示している。このことは、内容的には同論 MVK1-6・7 の入無相方便相にも繋がり、一方、「真実義品」における四尋思・四如实遍智という観法の所縁たる「vastu」の思想構造とも結びつく²⁰⁾。

3. おわりに

以上、『中辺論』の三性説は、虚妄分別と二取との緊密な関係によって成立していることが確認された。その哲学的・実践的意義は、安慧が「真実品」において三性を「根本真実」と規定した目的を五種の見解によって解釈する箇所によく

示されているので、それをまとめて、以下のように紹介することにする²¹⁾。

- ①「言説」と「第一義」と「言説と第一義との拠り所」とを示す為である。
- ②「顛倒」と「その顛倒の因」と「その顛倒の対治の所縁」を示す為である。
- ③諸菩薩が障害より離れる為の、断・遍知・現証の「対象たる」自体を示す為である。
- ④最高の智慧（般若派羅蜜）の相を三自性を通じて錯乱無く理解させる為である。
- ⑤世間智と出世間智とその出世間智の後得智との対象であることを示す為に、適宜に自性として三性が理解されるのである。

かくして虚妄分別の構造には実践修習を重視した独自の立場から空の思想を捉えようとする瑜伽行派の二諦とも言うべき实在観がその根底に潜んでいると理解される。それ故に『中辺論』の三性説は、①二取として顕現するアーラヤ識の思想構造と、②空性を内在化した虚妄分別、つまり、虚妄分別の雑染と清浄との二重的性格によってその哲学的・実践的意義が理解されるべきであろう。ここには三性を通して菩薩道の体系を統合しようとする瑜伽行派の新たな意図が窺える。

-
- 1) 勝呂信静 [1982], 「二取・二分論－唯識説の基本的思想－」, 『法華文化研究』8, pp. 16-17. 2) MVBh [N17,15-18,7]. 3) ①MVṬ [Y10,9-12]; ②MVṬ [Y11,10-14]; 拙論 [2008], 「『中辺分別論』における三性説の構造的特徴」, 『印度哲学』25, ソウル: 印度哲学会, pp.101-119. 4) MVṬ [Y11,16-17]; na hy abhūtaparikalpāḥ kasya cid grāhako nāpi kena cid grhyate, kiṃ tarhi, grāhyagrāhakarāhitam vastumātram eva /
- 5) MVṬ [Y13,9-14]. 6) MVṬ [12,24-25]. 7) MVBh [N18,20-22].
- 8) MVBh [N18,23-19,1]; MVṬ [Y17,13-17;18,15-21]. 9) MVBh [N19,1-4].
- 10) MVṬ [Y20,1-5]. 11) MVṬ [Y17,18-23]. 12) MVBh [N19,17-18].
- 13) MVBh [N19,19-20]. 14) MVṬ [Y23,11-17]. 15) MVBh [N19,5-6].
- 16) MVBh [N19, 10]. 17) MVBh [N40,21-41,5]. 18) MVṬ [Y22,8-9]; Cf.TrBh [40,23f]. 19) Cf. fn.4. 20) Cf. 高橋晃一 [2005a] pp.24-44; 同 [2005b] pp.18-33. 21) MVṬ [Y122,1-14; Pa85,3-13].

〈キーワード〉 vastu, 二諦, 中辺分別論, 虚妄分別, 所取・能取（二取）, 三性説
（龍谷大学仏教文化研究所客員研究員）